

牛と緬羊

岸 英次

氣の人も無いではないが、近頃衣料品不足の折から温かそうな毛絲の感觸に誘われて、つい『厩を空けて置くのも勿體ない』ということになる。

私なぞ若輩で近頃のことしかわからぬが、終戦この方、この地方の家畜の移動の激しさには驚かされた。家畜といつても主に大家畜であるが、終戦前後から一種奇妙な流言が眞面目に信ぜられて、勿論、當時盛んな牛馬の密殺がこんな理由からばかり行われたとは信ぜられぬが、恐らく當時の自暴自棄な氣持から、或は歸還して來た子弟の歡迎のためであつたろうが、歸省間もない私なぞ「よくまあこの村人は肉を喰い濁酒を酌むことか」と、秘かに感服したものであつた。人の話では牛だけでもこの村で約二百頭餘。飼育されていた約三分の二は村人の胃の腑の中におさまつたろうということだつた。ところが一年程経つて皆の氣分がやゝ落着いた頃、さて考えてみれば彼等にも落膽に似たものを感じざるを得なかつたようである。

最近此の地方の農村の人氣者は何といつても緬羊にとゞめをさす。以前から和牛の育成地として一寸はかり名を揚げた此の地方も、このところすつかり緬羊に人氣を奪われた形である。といつても、勿論牛馬が見限られたというのではなく、それらは、特に馬はこの地方の農耕に不可欠なものとして、以前に増して大事に扱われている。事實私の村などでも、馬の数は現在かえつて、戰爭中軍馬の徴用の盛んな頃に比すれば相當數増加している。村の統計を見ても昭和十年頃に較べれば廿頭餘も増えている。ただとも異つたように、感ぜられる點は、昔ならば中以上の農家を訪ねると、大概二つか三つの厩には自家用の牛馬の外に、牛が馬（多くは牛）の大家畜が飼育されていたものであるが、近頃では、空いた一方の厩には人氣者のこの小動物がぼつねんと坐つて、靜かに反芻を繰返しながら彼獨特の啼聲で迎えることが多い。『どうも此の啼聲が氣に障つて』といつて、一方の厩を遊ばせておく昔堅

それは丁度この頃から家畜が急激に而も飽く迄値上りを始めたからである。終戦の頃僅か四五百圓の和牛が秋には倍になり、翌春勿々四千圓になつたといつて驚いた。ところがその秋には八千圓、年を越して一萬五千圓前後になつては目をむいた。現在四萬圓、五萬圓といつてももう誰も驚かない。諦めたのである。馬についても、終戦の頃松木というところの喜左衛門の馬が郡一の高値、一萬圓で買手がついたというので暫くは村中の話題の的となつたが、近頃はどんな雑馬でも先ず三萬圓を下ることはない。今

になつてみれば誠に目まぐるしい昇降振りである。正しく馬喰^{バクロウ}の雪入時であつた。今でこそ彼等は税金が高いの、牛馬の出入りが少いのとこぼしているが、一時は「馬喰^{バクロウ}」という語が交換を意味する婦女子の日用語となつた程で、盛んな所謂馬喰取引が行われ、値上りを見越してどん／＼高値を付ければ必要不可欠な役馬はともかくとして、密殺をまぬがれた牛などは一たまりもなく馬喰の手に渡つた。丁度昨年四月頃、數年前の政府貸付牛が四十頭程まとまつて夫々飼主に拂下げになつた。代價はいづれも數百圓という格安であり、飼主達は貰つたも同然だといつて大喜びだつた。この牛達も殆んど總て一、二ヶ月後には一萬圓前後で馬喰の手に移つたといふことである。この場合は農家も心して代畜^{（多くは牛）}の入手に努め、又大概の場合馬喰の方で代牛なり、代馬なりを買入れと同時にあてがう慣わしであるが、それらも三、四才になつてやつと仔を生む頃には、多く肉牛として京阪方面に移出された。

それでもはじめは村に残る牛が段々貧乏になるだけで、どうやら數の方ではつじつまは合つたが、値上りがはげしくなるにつれ代牛もとかく手に入りにくくなつて了い、最近では、馬喰の方から「こんなに村の牛が減つてはこれから先、取引が手づまりになるばかりだから」といつて、村の農業會に和牛の共同購入を計つて呉れと泣き込んで來たこともあつた。何某の馬喰の増加所得税が何萬圓たつたなぞという噂をよそに、この兩三年間のめまぐるしい家畜景氣も御破算してみれば濁酒の醒め後のように、百姓達

によつて甚だ味氣ないものであつたと思われる。

二

この地方の綿羊飼育の歴史は未だ至つて日が淺い。以前から何時も三、四頭は村の好事家が飼つていたようであるが、ただ奇體な動物だといふ程度の關心しか惹かなかつたようである。ぼつぼつ増え始めたのが戦争末期頃からといわれ、主として衣類の不足を補ふ意味のものであつたが、ここ二、三年間の増加は目覺しい。現在では凡そ、百二、三十頭も入つてゐるであらうか。夫々部落には所謂綿羊熱心家がおつて集まれば得々として綿羊禮讃の語に終始するか、良く聞いてみると多くはこの二、三年來の綿羊飼育者で、飼育の有利なことはともかくとして、大概は飼育してゐた牛を高値につられて賣放し／＼しているうちに代りの牛を入れるのが次第に困難となつて、餘儀なく綿羊に轉向した者が多いようである。

勿調、現在のところ綿羊の魅力も棄て難い。終戦頃には相當優良な牝で二百圓も出せば容易に手に入つたのであるから、その後目覺しい値上りで可なり儲けた人もあるようだ。昨年秋頃は牝で千五百圓前後、牡で千圓前後迄のほり、本年春の市場相場では當才牝牡が夫々一萬圓、五千圓といふ高値を示した。羊毛の相場も、昨今は生毛で一貫三千圓を越えるといわれている。

この地方の綿羊は殆んどすべてが縣内の平坦地方、即ち村山方面（山形市を中心とする）から入つて來るのであるが、未だはつき

りした綿羊馬喰といつたものではなく、主に縣農業會主催の各所の綿羊市場から導入される。御承知のように馬については既に馬産組合という強固な馬喰の組織があり、農業會の畜産係などは到底手出しが出来ぬことになっているか、牛もとかく縣内取引は馬喰の方に強味があるので、この綿羊市場が山羊市場と並んでいわは農業會の金城湯池として最も力癪が入れられ、それだけ宣傳もかなり行届いている。お客さんは縣内各地から殺倒するが、困つたことには有力な競争相手が毎回出現して市場の人氣を引きさらつてしまふ。それは北海道のお客さんで、毎年縣内に乳牛を入れる特約があるため、他縣に比し若干は優先權も與えられているのであるが、この人々が思い切つて札ビラを切り綿羊の値をせり上げて了う。豫想外に高値になるのもこの人々のためだといつて市場歸りの百姓達がこぼしているが、とにかく、こんなルートを通つて、この村もどうやら綿羊の啼聲で賑つて來た。

三

村人の關心も深まり、飼育希望者も多いといふので、昨年の夏頃この村にも綿羊組合が設立され、夫々熱心家の中から役員も選任された。

當面の事業としては増殖、導入に主力をそそぎ、將來は昔の和牛に代り、綿羊の育成地として名を揚げようとするにあつた。つまり牛を綿羊に乗り代えようといふのである。事實縣内の綿羊の主産地として、年々北海道方面迄可なり移出する村山地方

に比すれば、この地方は農家の經營規模も大きいし、山野草にも比較にならぬ程盛れている。草の多いこの地方が草の少い村山地方から年々多數の草食動物を入れなければならぬなどとは、誠におかしいといふことは尤な話であつた。更に組合では近い將來羊毛の加工設備を新設し、共同加工、共同販賣まで進みたいといふ希望も強かつた。それならばといふので農業會の技手かこの趣旨の下に色々検討を加えてみると、直ちに増殖について甚だ困つた現象を發見した。即ちこの村の綿羊は、牝よりもかえつて牡の方が數多いといふことである。人間はともかく、家畜の増殖には甚だ面白くない現象である。その理由は簡單だつた。明らかに牝は値が廉く、而かも羊毛の生産量はかえつて多いこと、結局はこの村では當面の毛絲目當での飼育者が多いといふことであつた。そこで昨年は牝を出来るだけ増やすことに決議し、市場の買付もその方針で進むことになつた。

昨年の夏の或日、市場買付の綿羊が農業會の庭に着くといふので私も早朝から出掛けてみた。既に四、五人先着の人々もおつたが二、三時間後やつと綿羊を乗せた大八車が着いた。皆の失望したことに、あれ程力癪を入れたにも拘らず、降りて來る綿羊はいずれも皆矢張り牝ばかりだつた。やつと一頭食相な牝が牝達にかくれるようにして降ろされた。やれ／＼といつて歸る人もあつたが市場の値段を尋ねると、當才牡五千圓、牝は格安の七千圓とのことだつた。

昨年夏の農民の資金枯れは未曾有のことで、可なりな自作農で

も數千圓と纏つた現金を握つてゐるものは數少く、農業會の貯金殘高も此頃には減りに減つて、一頃七百萬圓を越すといわれたものが二百萬圓足らずとなり、これから事業資金、貸付金を差引けば餘すところ三、四十萬圓で、農家の生活資金の拂戻しに應ずるのに四苦八苦の状態であつた。村の資産係も「申込は四十頭程あつたがとても金が無くては買えるものではない。今年も良い奴は皆んな北海道行きに決まり、やつとこれだけ買付けた」といつて、~~て~~て牡七頭、牝一頭が市場買付の總計であつた。買付た細羊處分の後日譚として、申込はしたが金が無いのでおいそれと手出しも出來ず、それかといつて組合でも明日の拂戻しをひかえ全額貸付も出來ず、どうやら幾分か金廻りの良い百姓に半額貸付という~~こと~~ことで押着けた。それでも到々二頭は非農家の手に落ちた。

確かに細羊は現在有利な動物であり、従つて人氣者である。又飼育は容易で、その生産する羊毛は農家の生活を豊富ならしめるものではあろう。村の指導者も、又百姓達も、この動物に少からず望をかけ將來の夢を畫いてゐる。然し牛を細羊に乗り代へることはなかなか未だ大變のようである。それに私も細羊の愛好者ではあるが、最近つくづくこの小動物を観察するに、どうも往昔イギリスでエンクロージャを惹起した有名な祖先に比すると全く別種に屬するように感ぜられ、それ程積極性のある動物とは思えない。空いた厩には、矢張り牛を入れたいものだと思ふ。(廿三・一・一七)(山形縣駐在研究員)